

患者中心の医療胸に

県立がんセンター外科医原尾さん

県立がんセンター（宇都宮市）の外科医で、たくさんの乳がん患者と向き合ってきた原尾美智子さん（38）が、がん征圧のイベントに寄せられた寄付金によって運営される研修制度で、米国へ派遣される医師に選ばれた。患者中心のチーム医療を学び、日本でも個々の患者に応じた質の高い医療を行うきっかけにしたい——そんな思いを胸に、来月初旬、旅立つ。

制度は、日本対がん協会の「マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞」。今年2回目で、2人の医師が選ばれた。

原尾さんは仙台市で小学時代までを過ごした。父の転勤の関係で、山形、福岡を経て、熊本大学医学部で学んだ後、2000年から

「基礎研究と臨床の連携のよさも学んできた」と語る原尾美智子さん（宇都宮市）

3年間、レジデントと呼ばれる医師として県立がんセンターで勤務した。愛知県や熊本県の病院に勤めた後、09年に再び戻り、乳腺外科の常勤医として働いている。

原尾さんは奨励賞への応募動機にこう書いた。「年齢、生活背景、腫瘍の状態、どれをとっても二つとして同じ人はいないのに、現在自分がやっているのは、個々に対応した患者主体の医療かといえば、標準治療に基づいたマニュアル的な対応に偏っている感がある」

日本では主治医がなんでもやる主治医制がまだまだ主流だが、米国では外科医、腫瘍内科医、放射線科医、精神科医、薬剤師らが連携して患者を診るチーム医療が進んでいて、中でも原尾さんが研修に行くテキサス大学MDアンダーソンがんセンターは先進的なチーム医療の実践で知られて

いる。

原尾さんは「国民性の違いもあり、米国のチーム医療をそのまま日本にもってくるのは難しいかもしれないが、患者一人一人の病状や思いに沿った医療につながるため、最先端の現場を見てきたい」と話している。

奨励賞は、がん患者や支援者らが、公園や運動場などで24時間交代で歩き続ける「リレー・フォー・ライフ」に集まった寄付金を元にして、9月15日から16日にかけて、宇都宮城址公園で行われる。

夜通しのイベントになるため、周辺地域の理解と協力が不可欠で、開催場所がなかなか見つからなかったが、有志の医師らの奔走でようやく決まった。バザーなどのほか、夜にはロウソクに火をともして並べる「ルミナリエ」が予定されている。（和泉聡）

研修制度で米国派遣

